

## 2. 新聞報道

高齢協関係施設に関する新聞報道

岩手日報、岩手日日新聞、東海新報、福祉新聞、朝日新聞、毎日新聞、新時代、シルバー産業新聞

平成23年(2011)3月16日(水曜日)

# 介護現場 ピンチ 給食停止、事業休止も

**奥州市で特養不手際、  
給食運営する財團法人が倒産へ**

奥州市で特養不手際、給食運営する財團法人が倒産へと決着

**食糧、燃料不足が影響**

東日本大震災の影響は老人福祉施設にまで及んでいた。食糧や燃料の安定供給が待たれ、奥州市水沢区(福井幹)

市水沢区役所

灯油確保に躍起 市民ら躍起

灯油を販売するガソリンスタンドにもボランティアを走り回った人が次々に訪れた。奥州市水沢区役所前

岩手日日／平成23年3月16日

幸民 2011年(平成23年)4月5日(火曜日)

総合 (4)



月27日現在のうち、65歳以上の高齢者が36.4%（1万22人）、4歳（1万552人）（3歳未満）のうち、4歳未満が33.8%（1万552人）である。また、自衛隊に依頼し、代表者から聞き取りで実施。男女比は男性44・8%、女性55・2%だった。

対応が求められる。  
調査は3月23～27日まで自衛隊に依頼し、代表者から聞き取りで実施。男女比は男性44・8%、女性55・2%だった。

和式トイレしかない。

乳児がいる避難所は95カ所のうち授乳やおむつ交換スペースがあるのは13カ所だけだった。

更衣スペースがない避難所も196カ所に

## 県避難所調査

# 36%、1万人が高齢者慢性疾患は8.8%の2400人

上るほか、「7日に1回以上風呂に入れる」

との回答は76カ所にとどまるなど、厳しい避難所生活が浮き彫りになった。

県は洋式トイレの設置を進めるほか、乳児

に関する育児施設の整った避難所などへの移動を進める方針。今後は在宅避難者の実態講じたいとしている。

把握も急がれる。

県保健福祉企画室の石田啓一企画課長は「仮設住宅に入居できることで避難生活が長期化に及ぶ可能性が高い内陸への一時移動を進めるとともに、環境改善に向けて対策を

# 県内の老人福祉関係108施設に人的、物的被害

県は22日、東日本大震災で、特別養護老人ホームなど県内の老人福祉関係施設394施設のうち、108施設に人的・物的被害があり、少なくとも沿岸部の施設が津波で全壊したことを明らかにした。被災施設の入所者たるが、施設はほぼ満床状態で、被災し

た要援護者の受け入れが課題となっている。県長寿社会課による

施設の97%に当たる384施設の被災状況について市町村や施設職員から報告を受けた。こ

れ36人17人だった。それでは行方不明は80人。そ

のうち、津波で全壊したさんりくの園はそれを36人17人だった。一方、県は現在、被

壊した。入所者で死亡が確認されたのは50人で行方不明は80人。そ

の施設に移送した。

しかし、震災のショックや避難生活の長期化で介護が必要な高齢者が増加する恐れもある。

県長寿社会課の岡村輝次総括課長は「まず化で介護が必要な高齢者が増加する恐れもある。特別養護老人ホームに早期入所が必要な

だ。特別養護老人ホームに早期入所が必要な被災者を受け入れられ、内陸部の受け入れは被災施設の入所者の行き先を最優先で確保したい。その上で被災地の要介護者や内陸部の待機者にも県内の施設で対応できるよう努めしていく」としている。

岩手日報／平成23年4月5日

岩手日報／平成23年3月23日

# 長期的ケアの必要性痛感

関市道場の特別養護老人ホーム明生園は、小船渡市の特養・さんくの園に被災した福島利用者を受け入れている。沿岸部から内陸部への避難者は今後も増加が見込まれ、熊谷茂園長は「内陸部の高年齢者は、さつて長期的に被災地を離れていくべきだ」と指摘。体制的な支援の必要性を感じている。

同施設では3月20日、駆けつけの打診を受けた避難者は人を受け入れた。津波にまれて肺炎を患っていた人がかん院後に亡くなり、その後一人が入院。4月17日現在で1人が暮らしている。

お年寄りは比較的元気な様子を受け入れに感謝する言葉を聞く。「やがてまたここに寝泊りには帰りたい」など不安の声も耳にする。

宮城県気仙沼市などから入所できない

## 一関・特養ホーム 明生園 熊谷 茂園長

沿岸部の被災地への長期的な支援の必要性を語る  
熊谷園長

### 沿岸施設から高齢者を受け入れ



「手の活動が助けられた。訓練大会は上級、看護、専門学生が、一関・高野原地区支援活動で物を運ぶ、車椅子を押す、食事の介助など、労働力は本当に必要なこと、もの受け入れも随時募りしている。受け入れ初期は利用者の声を代弁する形で、多くの利用者も、市の声を代弁する形で、利用者も避難生活が長く、関連施設でも避難者を受け入れた。一人一人を運び入れて、多い行政からの保護施設ではございたのだが、いつ頃まで被災者避難者ではないと熊谷園長は語る。明生園の利用者は語る「明生園の利用者、一関の住民として責任を持って介護に専念している。」

物質や金銭面での支援相談を続ける方針を受けるが、一方で、施設開設職員の配慮をやりくりしながらの配慮もある。たしかに推測する。一人でも多くのマンゴートスティを申し込めた避難者を見て、できるかぎりか避難するが、その結果、今後は生活保護の形に

は語る「明生園の利用者、一関の住民として責任を持って介護に専念している。」

たる半萬以上の力を發揮している職員の姿も、最も進めた一避難者の新しい生活が始まるばかりだ。

岩手日日／平成23年4月18日

## 介護、 93事業所が休廃止

東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県で、高齢者向けの居宅介護サービスを提供している57の事業所が震災を理由に休業停止していることがわかつた。休止のうち5割は再開できる見通しもない。岩手県でも36事業所がサービスを提供していない。被災地の「介護力」の低下が浮き彫りになった。

震災の各サービスを提供する事業所の現況を調べた。震災理由による廃止は10事業所で、休止は47事業所。再開予定を回答できたのは、力所などだった。大半が沿岸部にあり、53事業所は建物が使えなくなってしまった。これを理由で抜けた10事業所のうち9力所が休廃止した宮城県南三陸町には震後、介護サービスを求める高齢者や家族から支援、訪問介護、通所バスを停止している36事業所のうち24力所は訪問リハビリで、医療ケアの機能低下がかかる。福島県は原発事故による警戒区域設定などで、状況を把握できていない。

避難所でケアが行き届かず、運動機能が低下したり、生活調が悪化したりした人が町の施設や病院に運び込まれた。同町の担当者は「震災前は介護を必要としなかった人の状況悪化が今まで」と話している。

(隅田佳季・森本美紀)

認定城県内の居宅介護事業所の状況 (県まとめ)			
理由(複数回答)	休止	廃止	合計
従業者不足	3	2	5
利用者が集まらない	2	0	2
事業所が使用できない	45	8	53
必要な備品がない	13	4	17
燃料や食材が確保できない	13	4	17



介護施設にも自宅で被災した要介護高齢者を受け入れる余力はない。ある特養では地震で一部の居室が使えなくなり、ホールにベッドを移した=岩手県陸前高田市

立が震ふた体にいたり黙つて持つてきた。外に出て徘徊する長男は、避難する際に骨を折り、動き回るに追いつかない。周囲もまた震災気味もあり、震災前に利用していなかった介護サービスに救いを求める。4月12日から、避難所の通所介護を利用が、その後も夜間に避

受け皿整  
りす。  
うした高齢者の心身状  
態悪化を食い止めるため、  
仮設住宅にサポート拠点  
を併設する構想がある。  
運営をまかされた事業者  
が仮設住宅や近隣に住む  
高齢者を対象に訪問、通  
所介護サービスなどをを行う  
もので、厚生労働省は設置  
難所だ。

**被災後、症状が悪化**

被災地の介護力が低下するなか、被災したお年寄りの体の状態は、長引く避難生活で悪化している。岩手県大船渡市内で長男(48)と2人で暮らししていた女性(78)は津波で自宅を失つた。避難所生活で、認知症の症状が進んできた。夜は眠れなくなり、何度もトイレに行く。落ち着きがなれど、女性は今月から、仮設住

内に動き回るので、長男の負担は軽くならない。ケアマネジャーに「短期間でも施設に入れてもらえないのか」と相談したが、受け皿がない。特別養護老人ホームの入所者が体調を悪化させて入院し、空きができるまで7日間だけ短期利用することができた。

受け皿整備、進まず

3県で11病院が  
8割

宅に入居することになった。今後も通所介護を利用する予定だが、特養への短期入所はどれだけ利用できるかわからない。担当ケアマネジャーの境谷くみ子さんは「この女性は息子さんが近くにいることで安心できる。仮設住宅に通所介護や宿泊機能のある拠点があれば、息子さんが疲れたら時には夜間も預かってもらい、いつでも顔を見に行くことができる」と話す。

朝日新聞／平成 23 年 6 月 9 日



# 52介護施設 定員超過

## 被災者受け入れ背景

各施設ごとの超過施設数と人数は▽宮古（8施設49人）▽両磐（9施設31人）▽岩手（中部8施設29人）▽釜石（5施設24人）▽気仙（4施設20人）など。1施設当たりの平均超過人数は3・73人。4月末時点の4・4人に比べ減少傾向にあるが、11・15人超過している特別養護老人ホームが2施設、6・10人超過の特養などは11施設となっている。国は3月、定員を超過して被災した要介護者を受け入れることを認めて

### 県内 7月末現在

本大震災の被災者受け入れで施設の定員を超過しているケースが県のまとめで52施設、194人(7月末現在)に上

## 1カ所平均3・73人

いる。

県は2011年度末

までに特養を当初計画

より約600床多い1く、県内の特養などで231床整備する予定

だった。沿岸で予定していた整備ができない

ところもあるが、1千

床以上を順次整備す

る。しかし、10年3月末点で早期に入所が

必要な県内の待機者は1235人。早期入居課長は「計画されてい

た施設整備と併せて、

仮設住宅で在宅サービ

スを利用するながら地域

養などの建設を認める

で暮らすことを細かく

方針を示したが本県では用地確保が難しい状

況。各市町村の復興計

画に合わせて本施設建

設を目指すケースが多

く、県内の特養などで

県沿岸部では仮設の特別養護老人ホームなどの建設予定ではなく、定員超過を

どのように解消していくかが課題だ。

### どう解消、県に重い課題

岩手日報／平成23年9月12日







加藤登紀子さん 来仙

被災地への想い歌に

歌手の加藤登紀子さんが15日、大船渡市猪川町の特別養護老人ホーム富美岡荘を訪れ、ミニコンサートを行った。「被災地の人たちが何を必要としているのか知りたい」と、13日から3日間かけて県内を回り、この日は陸前高田市の知的障害者

入所更生施設ひかみの園でも歌を披露した。加藤さんは同施設入居者らに年齢を尋ねるなどし「私の母は96歳だけど、『100まで生きたい』と言って前より生き生きしている。皆さんもこれからもっと元気になってください」と励ました。コンサートでは「知

ださい」と励ました。コンサートでは「知床旅情」「花」などを披露。マイクを使った弾き語りでスタートしたが、加藤さんは途中立ち上がるとアカペラで歌い始め、お年寄りの手を取って近い距離で声を届けた。



会場へ降りて高齢者の手を取り歌う加藤  
登紀子さん＝猪川町で

“ばいい”と被災者の気持ちに寄り添った。歌の途中から入居者や職員の間で自然と手拍子が起きて、加藤さんはもしゃりと人々の目を見つめながら澄んだ低音を響き渡らせた。歌声に聞き入る人々の瞳からは涙もこぼれ落ちた。加藤さんは会場の大好きな拍手に見送られな

表。被災地の人々を強く想うとともに、「できるだけのことをして、それでも足りない」と歯がゆく感じる心情を綴った歌詞で、「子どものように泣け

き肉を味わったり、必要な衣類をそれぞれ選ぶなどして楽しいひとときを過ごしていた。リアスホールで避難生活を送っている及川カツエさん(40)は「焼肉はとてもおいしかった。このような支援は本当にありがたい。人っていうのは温かいですね」と笑顔。今回の無料バザーの責任者である同教団大宮教会(埼玉)の足立國磨牧師は「みんな『おいしい』と言つてくれた。笑顔を作つてあげることができてよかったです」と話していた。

アモリ： ひでとてな田久の い。坂が尻川姫 こ題必

東海新報／平成 23 年 4 月 16 日

## トピックス



介護が必要な高齢者が自衛隊のトラックの荷台で運ばれてきた(写真提供=遠野長寿の郷)



松田拓矢施設長

東日本大震災で被災した岩手県・陸前高田市の老健施設「松原苑」(木川田典彌理事長)で死亡した高齢者15人が、避難先の施設で死んでしまうという痛ましい事故が起きた。一方、「松原苑」から94人の利用者と17人の職員を受け入れた特養「遠野長寿の郷」(岩手県遠野市・川上淳理事長)では、厳しい状況ながらも、できる限りの療養環境を提供し、最悪の事態を回避することができたといふ。

岩手県の内陸部にある「遠野長寿の郷」は、2階建の建物に特

養100床、ショートステイ20床、市からの事業委託を受けた生活支援ハウス10床(デイサービス定期25人)を併設する。

3月11日の午後2時46分頃、東北地方で大地震が発生し、松田

施設長はかつてない程の揺れを感じたという。当時はショートも満床で、2階部分には80人、1階部分には50人の利用者とデイサービスの利用客25人がいた。

地震の揺れが落ち着いた後、利用者、スタッフ全員の無事を確認。停電により、エレベーターが動かない中で、2階にいた利用者全員を1階に集めたら、自家発電があり、1階の一部だけ部屋の明かりを灯すことができるためだ。

幸い断水はない

が、電気と方  
スがまつたぬ  
り重ね、顎筋に体温調整を行った。  
寒さとストレスの限界を感じ始めた

日が続いた。衣類と毛布を可能な限り乗せて、マンパワーで積み降ろしていく。さうに、施設のエレベーターが利用できなかつたため、3~4人がかりで車いすを抱え上げ、2階に運ぶ作業を繰り返した。

利用者、職員ともにストレスや疲労が見え始めた19日、松原苑を運営する医療法人勝久会から、自らの運営する施設で被

# 生死分けた要介護者の避難先確保 利用者100人の受け入れを申し出た特養

ほどの震災だったといふ  
「松原苑」の利用者受け入れを即決

ラフライが一段落した14

の朝、スタッフを集め、今後の方針について会議を開催。その中で「地域に貢献する」といった法人の理念の下、災害で困っている人を2階部分に受け入れることを職員同士で確認した。

その後、松田施設長が市の関係機関に出向いた際、陸前高田市の老健施設「松原苑」が津波で被害を受けたため、利用者94人、職員17人を県立遠野高校に一時避難させたという話を聞いた。

松田施設長は「介護が必要な高齢者が体育館で生活するのは相当な困難が伴う」と判断し、その場で全ての利用者、職員の受け入れを即決した。

松田施設長は「介護が必要な高齢者が体育館で生活するのは相当な困難が伴う」と判断し、その場で全ての利用者、職員の受け入れを即決した。

松田施設長は「介護が必要な高齢者が体育館で生活するのは相当な困難が伴う」と判断し、その場で全ての利用者、職員の受け入れを即決した。

松田施設長は「要請があれば、できる限り受け入れを行いたい」と語った。

シルバー産業新聞／平成23年4月10日



廊下や共有スペースは利用者やベッド、布団などであふれかえった(写真提供=遠野長寿の郷)

災害を受け入れる  
という連絡があり、  
翌日までに全ての  
高齢者を送り出した。

最終的に「遠野  
長寿の郷」では3人が緊急入院  
し、それ以外の人は廊下や共用  
たものの、他の避難先で起きた地  
震によるストレスや疲労での死亡  
事故は起きたなかった。

エアコンが作動し、介護スタッ  
フもいたため、一般の避難所に比  
べて、介護療養に適した環境を提  
供できた部分が大きいと松田施設  
長はいう。



「松原苑」のあった陸前高田市は、津波により壊滅的な被害を受けた(写真=本紙 橋村寿人)





# 東日本大震災 介護の現場は

着手

## モニタリング実施困難 ガソリン不足の影響深刻

いわての保健福祉支援研究会



卷之三



# 2012年改定に向けた助成

立教大学 コミュニティ福祉学部  
教授 服部万里子

## 1 地震・津波に放射能汚染の困難の中から

前には、生活の不自由な者で  
いる。誰もが黙々と耐え  
ている。

埼玉県は「さいたまスープ  
アリーナ」に1~900人を受け  
入れ、さらに各市町村が、その  
後の生活再建に向けた受け入  
れ、支援をしている。東京都は  
透析患者の受け入れと医療確保  
を行っている。全国の社会福祉  
協議会は、ボランティア職員を

## 2 災害時に介護が果たした役割と課題

離難所は近所に選ばれていたが、假設住宅は広い地域に建設され、何もない地域で建設された。その結果、今までの人のつながりが切れ、人は孤独死した。「孤独死」と言う言葉はなかった。

そのような中でも、階段を東通に加え、「緊急連絡網」の電話が機能しないことが判明した。また、首脳團は宿泊地や電話で連絡が途絶する現状を憂慮する。そこで、安否確認会議が開かれた。

や移動手段など、の日常生活の支援が第一、それらの欠乏が心身を弱め、やがて死んでしまう。この現象は、古域で見られるのが多い。車をかけている。物資は届いていないが、「個別の自宅」まで運ぶべき手足がない。まず、できるところから人を繋ぎ、生活を支援しよう。

3 まず生活支援、そして  
専門職の連携的支援を

ど、介護職やケアマネジャーの地に付いた活動は独居の要介護者を支えた。

シルバー産業新聞／平成 23 年 4 月 10 日



# 東日本大震災 混乱の現場で痛感

## 「緊急介護チーム創設を」

うちで ゆきみ 社会福祉法人典人会総所長。グループホームや特別養護老人ホームなど10施設・事業所を運営。震災時は一部施設が津波の被害を受けたが、犠牲者はいなかった。直後から住民や在宅の要介護高齢者を受け入れた。震災後は災害派遣介護チームの創設を提唱し活動している。



内出幸美さん

施設に迷惑をかけないよう、自分たちで賄つて屋外で朝食をとる石川県からのボランティアチーム



社会福祉法人  
典人会総所長

### 内出幸美さん

大震災直後から電気、水道のラインが断絶、通信、道路も寸断、何よりの恐怖は余震とそれによる津波だった。沿岸部は壊滅状態であったことから、直ちに被災した施設からの要介護者の受け入れや家を失った地域住民が法人内の各施設・事業所（10施設・事業所を運営）へ押し寄ってきた。

夕方からは炊き出しが始まつた。法人本部にある特別養護老人ホームのLPガスは使用可能だったので、近くの公民館から（食

物が無いのでおにぎり50個お願

いします」と依頼され、即座に提供した。乳飲み子をかかえたお母さんからは「ミルクが無いんです」と頼られた。次々に来る住民への対応に追られ、その場その場の判断でとにかく物資提供、寝床の提供に追われた。

東日本大震災は我々に多くの教訓を残したが、いち早く「災害派遣医療チーム」（DMAT）の介護版「災害派遣介護チーム」（DCAT）の創設を訴えたのが岩手県大船渡市の社会福祉法人典人会総所長の内出幸美さんだ。情報も見通しもない混亂する現場で救援システムの必要性を痛感したという本人に構想を語ってもらった。

法人の中には津波のために孤立してしまった事業所もあった。自衛隊が駆けつけたのは3日後であった。当然、そこではサバイバルが始まった。過酷な状況下では管理者だけではなく、職員一人一人が瞬時に判断をしなければならなかつた。一方、職員は、自分が生きていることを家族に伝えることや家族の生死を知ることもできない状況であった。

このような状況下で、職員は肉体的にも精神的にも疲労し、そのビクは3日目の3月13日だった。そして、何より見通しがつかない

漠然とした恐怖がのしかかってきた。私は「これは長丁場になる」と感じ、職員に「応援部隊を要請に行ってくる」と告げ、通信手段の途絶えた中、唯一消防署に設置された衛星電話をかける市民の列に並び、一人3分間という時間的制約の中で、いつもお世話になっている公益社団法人日本認知症グループホーム協会（東京都新宿区）に連絡し、SOSを発信した。

それによく応えてくれ、5日後の3月18日に第1陣の応援部隊が石川県から駆け付けてくれた。デイサービスの送迎用ワゴン車に支援物資をいっぱい積み、リーダーの精神保健福祉士・看護師2人、介護福祉士3人の構成メンバーであった。当時はまだ被災地の状況が分からぬ、マスクもボランティアが行くことを制限していた中、顔見知りのメンバーだったこともあり、感極まつたことを今でも覚えている。その後は、続々と各団体、個人のボランティアが介護施設・事業所に入ってきてくれた。

### 第74号 各面の内容

- 3 面 「長編動画」来月公開
- 4・5面 コラムのページ
- 6・7面 「心の旅路へ」「老いを撮る」「認知症110番」
- 8 面 「ほん」「東西南北」など

（2面に続く）





第2539号 第3種郵便物可

### (3) 福島県 東日本大震災から学ぶこと

表1 福祉施設の県別被災状況

都道府県	人の被害						物的被害					
	利用者			職員			全壊・半壊			一部倒壊等		
	死亡	行方不明	合計	死亡	行方不明	合計	全壊	半壊	一部倒壊等	流出	合計	
岩手	148	64	212	17	43	60	39	319	358			
宮城	333	35	368	68	49	117	78	416	493			
福島	36	0	36	2	0	2	4	329	333			
その他	0	0	0	0	0	0	0	742	742			
合計	517	99	616	87	92	179	121	1805	1926			

\*その他は、北海道、青森、秋田、山形、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、新潟、長野、岐阜、静岡、愛知の16都道府県

表2 福祉施設の種別被災状況

種別	人の被害						物的被害					
	利用者			職員			全壊・半壊			一部倒壊等		
	死亡	行方不明	合計	死亡	行方不明	合計	全壊	半壊	一部倒壊等	流出	合計	
高齢者	453	57	510	68	80	148	58	649	707			
障害	21	21	42	13	8	21	32	311	343			
児童	43	21	64	6	4	10	31	836	867			
その他	0	0	0	0	0	0	0	9	9			
合計	517	99	616	87	92	179	121	1805	1926			

生でいる裏を覗く。行動支援がおこなわれたのは、おおむね新聞紙によつていた。